

## VI 4 系列の学び

### 1 郷土・環境系列

#### (1) 花植え交流

##### ①目的

草花の活用を通して高齢者や幼児、その保護者、施設職員など異なる年代との交流を持ち、地域とのつながりを経験する。普段は学ぶ側の生徒が教える立場となることによって、より深い学びへとつなげる。

##### ②内容

3年次農業科目「総合実習」で栽培した草花を、地域の2福祉施設へ年間2回（春6月・秋11月）配付した。配付先は、松阪市立子育て支援センター「かんがるー」、老人福祉施設「さくらんぼ」の2施設であり、後者は高校からすぐの施設のため、生徒が持参して搬入した。



##### ③検証

直接交流が難しい状況のため、一昨年以前のようなプランターへの定植を生徒が指導して行うことはできていない。代わりに、プランター配付に合わせて生徒からのメッセージや写真を掲載した模造紙を作成して、施設へ掲示することによって、高齢者との関わりに意識を向けさせた。

#### (2) ルピナス花壇の管理

##### ①目的

飯南・飯高地域を訪れる方々に向けたオープンガーデンの管理の一端を担う活動を通して、地域活性化やホスピタリティについて考える。

##### ②内容

国道166号沿い、本校近くにルピナス花壇があり、毎年5月頃にはフォトスポットとして観光客でにぎわう。3年次学校設定科目「郷土の自然」において、花壇を観察教材として利用させていただくと同時に、栽培管理の一部（播種・除草）学習に取り入れ、花壇の所有者へ協力した。



##### ③検証

花壇へ出向いて学習する機会が今年度は比較的多く、年間6回あった。昨年度までの管理作業だけでなく、所有者から依頼され、一部区画の播種を生徒が行うこともできた。また、わずかの時間であったが所有者と生徒が対面する機会が得られた。秋の天候不順の影響でルピナスの生育は芳しくないが、開花最盛の5月に結びついたときに、わずかでも関わりを持ったことを生徒に思い起こしてもらいたい。

## 2 介護福祉系列

### (1) 地域福祉演習

#### ①目的

本科目の目的は、地域の福祉課題を取り上げ、実践事例を学び、専門的知識と多角的な思考力を身につけて、演習などを通して問題解決する能力を養うこととしている。

#### ②内容

今年度は新型コロナウイルス感染症拡大予防の観点から校外の教育活動が制限されたため、専門家による講演を実施した。伊勢保健衛生専門学校歯科衛生学科松本由美氏による「お口を守る 命を守る」と題して口腔ケアの重要性について講演を行った。虫歯の原因、予防方法、歯周病に伴う全身の疾患、口腔ケアの実践など、高齢者や障害者介護に関わる知識・技術だけでなく、日常生活におけるケアの重要性について学んだ。



#### ③検証

実践事例の紹介を含めた内容は、専門的知識の習得の一助となったが、コロナの感染予防ために口腔ケアの実演までは実施できなかった。

### (2) 介護実習

#### ①目的

コロナ禍において、予定されていた15日間の福祉施設での現場実習が中止となった。可能な限り現場での実情を学び、学んだ知識を将来活用できる見通しを立てる。

#### ②内容

7月に、本校の卒業生であり住宅改修専門業者として活躍している建設会社勤務の堀内寿哉氏による講演会を実施した。福祉と建築の関係、地域住民のニーズなど住宅改修の実際について知識を深めた。また堀内氏は、ホテルや飲食店での接客、福祉用具の会社の営業など様々な仕事の経験があり、生徒はこれまでの経験が現在の仕事に活かされ繋がっていることを学ぶことができた。



#### ③検証

生徒は住環境コーディネーター3級の資格取得のため、住環境整備について週2時間学んできた。そこでは学べない素材によって手触りが全く違う手すりや、利用者のニーズに応じた取り付け方法などを体得できた。また、「いいなんゼミ」で福祉用具などについて取り組んでいる生徒にとっては、住宅改修の専門的なアドバイスを受ける機会となった。今後もぜひこのような講演会の機会を設けていきたいと考える。

### (3) コミュニケーション技術 「看板プロジェクト」

#### ①目的

地元企業と協働し、学校近くにある企業の案内看板をリニューアルすることを通して、地域課題や活性化に貢献する態度を身につける。また、企業見学や説明からコミュニケーションを図り、企業の意図を確実にとらえ、看板製作の発案、協議そして提案まで生徒が協働する技術を身につける。

#### ②内容

一昨年度9月、「ボランティア基礎」の授業において、提案企業である地元の株式会社三ツ知製作所の方から、看板のねらいや地元飯南・飯高地域を活性化したいという想いをうかがった。しかし工場見学や説明を受ける中で、2月頃からのコロナ禍で休止となった。



昨年度、生徒は3年次生になって、活動は「コミュニケーション技術」の授業へと引き継ぎ、授業選択者1名を新たに加え、9名が6月から活動を再開した。学校内外での活動が制限される中、地域の魅力を踏まえた看板作りを目指し、近隣の地区の散策や学校周りの魅力探しから始めた。

カリキュラム開発等専門家の浅野吉英氏からアドバイスをいただきながら、看板アイデアの出し方を学習した。コロナ禍で兵庫県からの来校が困難になる中、オンラインでのアドバイスを聞くことができた。

出した100近くのアイデアから協議して30くらいまで絞り込み、さらにキーとなるアイデアに絞り込んだ。「会社が何を作っているかわかるように」、「いつか働きたくなるような」、「見るなど言われたら見たくなる仕掛けを使う」、「飯南・飯高の魅力はホームページで見てもらおう」という方向性を担当者に確認すると大変気になっていただき、激励の訪問までしていただいた。そんな矢先、コロナ禍の第三波もあり、提案までの運びに支障をきたし、校内の取り組みとして、アイデアの図案化とプレゼンの完成までが完了した。ただ、最終的には、企業の同意は得られず、次年度への活動の継承を余儀なくされた。



今年度活動する生徒は、1学年下の「コミュニケーション技術」の選択者16名で、メンバーも一新され、あらためて三ツ知製作所の方から看板のねらいを聞き、活動は始まった。工場見学もさせていただき、技術力の高さや山間部にありながらもグローバルな企業活動をしていることを学んだ。

また、6月には今まで活動してきた先輩2名が来校し、自分たちのなしとげられなかった看板完成を後輩たちに託し、激励した。後輩であるこの学年は1年次に本校初のフィールドワークを始めた学年でもあり、地域の魅力探しを経験している。まずは、飯南・飯高地域の魅力発見から始め、生徒はフィールドワークを思い出して看板にこめる思いを共有した。その中で、助言者の浅野氏より提案されたアイデアを活性化し、統合していく「ワールドカフェ」を実施し、会議の運営技法も学んだ。9月は緊急事態宣言でオンライン授業となったが、「マインドマップ」でさらにアイデアの幅を広げた。登校再開後は、アイデアの図案化を元美術教員である浅野氏より、毎時間オンラインでアドバイスをいただきながら進めた。

11月17日には、第1回プレゼンテーションとして三ツ知製作所を訪問し、4つの活動グループごとに看板デザインを紙に描き、図案の意図やこめた思いを発表し、写真を集めてモザイクアートにする案が高く評価をいただいた。企業より、実際に看板製作会社に持ち込める所まで作ってほしいと依頼を受け、松阪市地域おこし協力隊の高杉亮氏に相談した。高杉氏はWebデザイナーとして活躍されており、生徒が考えたモザイクアートから図案の仕上げまで協力をしてもらえることになった。

1月12日を最終プレゼンテーションとして、プレゼンの準備とモザイクアートに使う写真集めを校外で呼びかけた。全校生徒にはポスターとグーグルクラスルームで告知し、校外には飯南飯高両地域振興局をはじめ、道の駅やカフェにポスターで呼びかけ、その結果724枚の写真が集まった。

三ツ知製作所での最終プレゼンテーションでは、最終的に絞った3つの図案をプレゼンし、込められた思いが評価されて3つの図案を高杉氏にまとめてもらうことが決定された。看板製作会社と調整し、2月28日の卒業式予行の日にお披露目式が予定されている。

### ③ 検証

通算2年半に渡る看板プロジェクトであったが、アイデアを練るコミュニケーション技術だけでなく、さまざまな体験をすることができた。看板のアイデア出しでは、浅野氏から「マインドマップ」や「ワールドカフェ」などの実用的な技法を学ぶことで、生徒はアイデアを出していくことが素早くなっていった。また、楽しくアイデアを練る中で、仲間の意見に肯定的にアイデアを盛っていく方法も、しっかり習得していった。そして、企業のことを理解する中で、山間部でありながらも、海外の工場もあり、地元が世界につながっていることを実感できた。素地としてフィールドワークで地域の魅力発見活動をしてきた学年だが、さらに地域の魅力が工場の中にもあることに気づくことができた。



### 3 総合進学系列

#### (1) 学校設定科目「社会科学入門」

##### ①目的

本科目は高大連携授業として、県内大学から行政学、看護学、教育学、経済学を専門とする教員を講師として招請し、各専門分野の講義や演習を通じて学問に対する興味・関心を育み、社会科学を中心とする学問の基礎的素養を養うことを目的としている。近年は松阪市の政策や地域の魅力について考える時間を確保し、各専門分野と関連した地域の題材をもとにして学びを進めている。

##### ②内容

今年度は9月に緊急事態宣言下での在宅学習期間があったものの、例年通り4名の教員に来校いただいた。隔週で大学教員が高校を訪問し、高校教員とのティーム・ティーチングによりリレー方式で授業を行い、その翌週は内容に関するレポート・プレゼン作成をおこなう。今年度の教員（専門分野）と講義内容は、以下の通りである。

- ・村林 守 三重中京大学 名誉教授 (行政学)
  - ・地域とは何か、地域の人口が減るのはなぜか (4/27) →レポート (5/11)
  - ・政治の力で人口減少をくい止めることができるか (5/25) →レポート (6/1)
- ・内田 秀昭 三重大学教育学部 准教授 (経済学)
  - ・地方創生と農業 (6/8) →6次産業化を考えるプレゼン発表準備 (6/15)
  - ・6次産業化のアイデア共有、農林水産業の高付加価値化、ふるさと納税、情報発信、地域通貨の効果 (6/22) →レポート (6/29)
- ・中北 裕子 三重県立看護大学 准教授 (看護学)
  - ・地域住民の健康を増進保持するため必要なこと (10/19) →レポート (10/26)
- ・中西 良文 三重大学教育学部 教授 (教育学)
  - ・良い学習に大切な4つのポイントについて (11/2) →授業計画作成 (11/9)
  - ・地域学習の授業展開について (11/16) →最終の授業計画作成 (11/30)

例年村林先生の講義内容が難しいという生徒意見は多いが、近年は1年次「産業社会と人間」のフィールドワークで地域体験をしているため、地域を肌感覚で持ちながら受講することができた。そのため、講義内容にあった行政がサービスを行う意味や少子高齢化がなぜ起こっているのかについて、身近な話題として考えることができた。そしてバトンを承けた内田先生の地方創生に関する講義においても、六次産業に取り組んでいる地元企業への見学を行った生徒は内容が理解できており、プレゼン発表では地元企業の実践を紹介するに至った。また他地域の事例と比較しながら、地域の特産品を活用した発信法やふるさと納税について考える生徒が出てきた。



9月は在宅学習期間のためオンライン授業での学びとなったが、地域をより良くする活動をしている動画やデータ資料の見方について考え、学びを止めずに自分たちなら何ができるのか深めていった。そして休業明け初授業では、プロフェッショ

ナル仕事の流儀「答えは、地域にある ～地方公務員、寺本 英仁～」を視聴し、なぜ地域を活性化するのか、どのように地域を活性化させ、どのような課題や困難があるのかについて改めて理解を深めた。

その後の中北先生および中西先生の授業は、自分たちの思いから一つのを創り出す活動を中心とし、主にグループワークで行われた。中北先生の活動では、「地域住民の健康を保持増進するために必要なこと」について松阪市の健康づくりにおける重点目標と照らし合わせながら、具体的にどのような対応をしていけば最良なのか考えていった。中西先生の講義では、昨年度のように中学1年生対象の地域学習の授業計画をグループに分かれて取り組んだ。今年度の生徒は授業の題材として、「地域創生」、「地域の自然」、「過疎問題」、「地域の良さ発見」を取り上げ、4グループ中3グループでフィールドワークを組み込んでいた。生徒は「講義を受けるのも良いが、実際に地域を見て体験することで理解が深まる」として、体験活動によってリアルを知ることが大切だとした。そしてこれは2日間での活動内容となっており、昨年度「産業社会と人間」での体験が活かされた授業計画であった。

今年度も高大連携授業以外に、「興味のあることと地域との関わりを考えよう」と題して、夏休み前に生徒自ら主題を設定して地域に関する内容に取り組んだ。そこで自分の興味と地域とを繋げたり、講義内容を改めて読み直していったりする中で、「講義で受けたことが実際にそうなのか」と疑問を持った生徒から「地域の人と話をしてみたい」という声が高まったため、校内初の地域住民とのトークフォークダンスを開催した。詳しい内容は「Ⅶ 通常授業における授業改善について」の項で記載するが、生徒ー地域住民双方に対話が活性化し、素朴な疑問を投げかけながら生徒たちは頼りになる身近な大人の存在を改めて知ることにも繋がった。

今年度も学年末の研究発表会（2/22）では「地域×分野×興味」を主テーマとして、これまでの学問分野に関するものや夏休みに取り組んだ内容と地域とを掛け合わせて、新たな価値創造を考えるアイデア出しを行った。内容は荒削りではあるが、地域住民との対話で得られた新たな疑問や関心を組み込む生徒もあり、来年度「いいなんゼミ」のテーマ設定へのきっかけ作りにはなることができた。

### ③検証

1年次「産業社会と人間」で地域へのフィールドワークを経験することで、本授業の学習活動に深まりが出る。このことは、昨年度・今年度と授業を進めていくながら確信へと変わってきた。そして地域を軸にした学びに自分軸が入ってくると、より良くするにはどうしたらよいのかという視点で考えることがスムーズになってきたと考える。今年度は地元中学校出身生徒が約半数を占めることもあったが、例年以上に1年次での学びへ連動しながら取り組むことができた。やや興味・関心が先行して学術的な部分が欠けているところもみられたが、自己の在り方生き方に繋がる探究的な学びへと繋がるものになったと感じる。

また、昨年度組み込んでいきたいと考えていた「地域の声を聴く時間」について、生徒からの要望もあってトークフォークダンスとして実現することができた。学術的な部分と身近な内容が繋がったとき、生徒の学びが自走していく。このことは、次年度の授業設計にも繋がるものとなった。

## (2) 学校設定科目「国際社会と日本」

### ①目的

本科目は様々な時事問題について学ぶ中で、国際社会における日本の役割についてグローバルな視点で考える力を身に付けることを目的とする。また、異文化に触れて理解することで、国際人としての日本人のあり方を学ぶ。鈴鹿大学、株式会社鈴りん探偵舎、松阪市、飯南高校が締結した4者協定による学習環境の整備も想定されたが、今年度は新型コロナウイルス感染症拡大防止のために回避した。

### ②内容

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、従来のように年間を通して大学の先生方に来校していただくことや、一昨年のように大学の留学生に本校に訪問していただくことは叶わなかった。しかしながら、三重県環境生活部ダイバーシティ社会推進課の事業を活用し、10月25日3,4限に国際交流員(CIR)のロッシ・ウィルソンさんを招き、ブラジルの文化やブラジルと日本、三重県との関わりについて授業を実施していただいた。三重県在住の外国人のうちブラジル人が最も多いことや、かつて日本からブラジルへ多くの移民者がいたことなど、事前学習もしていたものの、改めてロッシ・ウィルソンさんとやり取りをする中でブラジルと日本の人々の行き来・交流の大きさを知ることとなった。



また、飯南・飯高地域や松阪市を知ることと、今後増えるであろう外国人観光客の誘致を目的として、飯南・飯高地域のもの・コト・人について学習し、英語でプレゼンテーションを行った。さらに、この学習をとおして得られた情報等をもとに、飯南・飯高地域に人々を呼び込むための食べ物＝飯南飯(いいなんめし)・飯高飯(いいたかめし)・ス飯ツ(すいいつ)を検討した。

### ③検証

コロナ禍で、例年実施してきた大学の先生方による授業と、一昨年度に試みとして始まった高大連携による留学生との意見交流が、昨年度にひき続いて一度も開催できなかった。留学生との交流は世界と日本、この地域を比較する視点を持つこと、大学との連携による授業で様々な知見を広められることが期待できるため、状況が許せば再開し、交流する機会と考える場を多く持たせたい。

また、プレゼンテーションについては、1年次に地域のフィールドワークを行っているものの、知らないことも多くあり学習を要した。地域の紹介にあたり紙面を各グループ共通にすることで見やすくし、情報をまとめる力を養った。地域を改めて見直すことで、その魅力は何かを再確認することができた。一方、限られた紙面での情報にするか、その情報をいかに伝えるかなど盛り込み方に苦労した。

飯南飯・飯高飯・ス飯ツについては生徒たちの発想に委ねるところが大きいですが、インパクトや実現性、コスト面や普及活動等において、まだまだ研究・開発の余地があるように思われた。

## 4 コンピュータ系列

### (1) 電子商取引の取組

#### ①目的

ビジネスにおける電子商取引の意義や役割を理解するとともに、ウェブページを用いて情報を効果的に伝えるための知識や分析・企画・立案・制作・公開の手法を身につける。

#### ②内容

「飯南高校ホームページ大変身企画」と銘打って、本校のホームページを今以上に見やすく魅力的にし、閲覧数を伸ばすことを目的に何ができるかを検討した。ここで注目したのが“東京オリンピック 2021 開会式ピクトグラム 50 個パフォーマンス！”である。誰が見ても何の競技であるかわかるスポーツのピクトサインが誕生したのは 1964 年の東京オリンピックであることを知り、これをヒントに 3D プリントを使って、飯南高校ホームページで使用できるピクトグラムアイコンを作成した。



#### ③検証

生徒のアイデアでいくつもの案が生まれ、検討する中で以上のようなピクトグラムアイコンを完成させることができた。今後このアイコンを使って飯南高校ホームページを充実させていきたい。